

異との國くにのはしくく迄まで、薰かをらぬ限くまもなく、星霜せいそう茲こゝに

二千三百有餘年ちゆうえねん、波荒なみからき穢けいの邊はたりの木きの下もとに、英

魂こん長とへに眠ねむれるも、精靈せいれい宇内うちを照てらして、人心じんしんを

鼓舞こぶするもの果あたして幾許いくげすや。(完)

附言 大題小題なる名の下に誠に断片的の材料を蒐集し既に此

の紙上に掲載せるものも数次なるか少し思ふ所もあれば一先
此の稿は此處に筆を收め機あれば別に題を改めて相見ゆるこ
と、いせんとす請ふ諒せられよ。



わが里

佐々木信綱

水車ゆるやかにめぐり
にはとりほがらかにうたふ
あらしの聲きこえず
ねたみのちりもこゝにこず

のどかなるかなわが里
門をめぐるいさゝ川
流ゆるく水きよく
底の小魚も數ふべし

じづかなるかな我やど

まどの柳枝たれて

とほき牧場の牛のこゑ

近き林の鳥の歌

昔のよそひ引きかへて

やつれしきぬをまとへども

いとし子いだくわが妻の

おもわにみてもゑみの色

われはやぶれぬ人の世の

あらさはげしきたいかひに

されども得たりこの里に

清き平和となぐさめを

海

七つ八つの海士の子が

濱の眞砂にいけほりて

堤きづきて水ためて

遊びながらのひとり言

小花 清泉

『大きくなれよ強くなれ

大きくならば我も亦

海原とほくこぎいでて

わまたの松魚つりあげじ』

磯邊の小松とし毎に

春のみどりの色かへで

大きくなると諸共に

彼も大きくなりにつけり

かれの望はとげられて

今日のりぞめの松魚船

武士の子の初陣うしきんに

いでたつがごと勇ましや

右に左に四人づつ

八人の人のこぎゆけば

舳先にさはるものもなし

山なす波も波ならで